

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第6号

特集： 戦争の記憶と郷土史

- ・ 関飛行場及びその関連施設の調査 陸軍秘匿飛行場の作戦構想とその実態
藤井大輝 山内康誠 小山政亮 谷村宗晃
河路康太 小原和也 渡邊貫太 2

- ・ 聞き書き・風船爆弾 戦時下の武儀高等女学校第24期生
 林直樹 10

- ・ 後記

2022年3月15日

関飛行場及びその関連施設の調査

陸軍秘匿飛行場の作戦構想とその実態

岐阜県立関高等学校地域研究部

藤井大輝 山内康誠 小山政亮 谷村宗晃
河路康太 小原和也 渡邊貫太



関飛行場滑走路跡（西北西から東南東を臨む）

目次

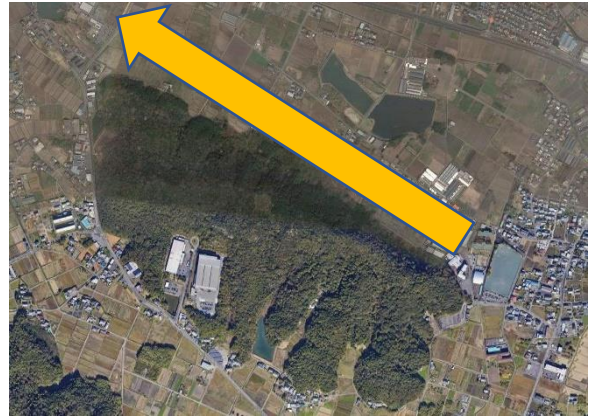
- 1 はじめに
- 2 関飛行場の現状
- 3 自治体史及び防衛省関連資料の調査
 - (i) 建設時期について
 - (ii) 捷号作戦と決号作戦
 - (iii) 秘匿飛行場・特攻作戦用飛行場としての関飛行場
 - (iv) 飛行場の実態
- 4 関飛行場の考古学的調査
 - (i) 司令部地下壕（第1号地下壕）と第10・11号地下壕
 - (ii) その他の地下壕の現況
 - (iii) 滑走路
 - (iv) その他の施設
- 5 結びにかえて
資料編 文献・考古資料・聞き取り調査

1 はじめに

戦闘機で敵の艦船や大型機に体当たりする特攻作戦。一般には、遠い南海で行われていたとされるその作戦は、大戦末期には全国各地で計画されており、我々の住む岐阜県もその例外ではなかった。2021年1月31日、我々は、学校から自動車ですら5分ほどの場所に陸軍飛行場があったことを知った⁽¹⁾。関連する自治体史を調べると、岐阜県中濃地域に秘匿飛行場が建設されたことが記されていた。この半年間、我々は様々な資料を読み、関係者を探し、飛行場跡やその周辺を踏査した。今にも崩れそうな地下壕がいくつもあり、戦争体験を語れる高齢者が少なくなっていることが分かった。語り手が減り痕跡がなくなりかけている今、少しでも多く情報を残し、後世に飛行場の実態を伝える資料とすることを目標に、レポートにまとめることにした。

2 関飛行場の現状

関飛行場は、現在の関市大杉から美濃加茂市稲辺、坂祝町深萱にかけての地に戦争末期に建設された。カナクズ山（標高126.9m）と呼ばれる丘陵の北側に広がる台地上に、東南東から西北西にかけて未舗装の滑走路が造成された。米軍撮影の航空写真（1947.12）を見ると、すでに滑走路は消え農地化されているが、全長2km前後、幅100m程度の滑走路を想定し得る。カナクズ山や周辺の丘陵には今も飛行場関連の地下壕が残されている。現状、滑走路の東端には自動車学校、西端には青果販売施設（ふる里農園）が立地する。滑走路の主要部分には現在も広々とした農地が残り当時の様子が見えがえる。



上：関飛行場の現状(Google Earth)

黄色の矢印が滑走路推定ライン（約2キロ）

下：米軍撮影航空写真 1947.12（国土地理院ウェブサイト）

3 自治体史及び防衛省関連資料の調査

まず我々は『関市史』『坂祝町史』をはじめとする自治体史の記載を調べた。生々しい証言の数々が採録されているが、陸海軍の動向や戦局との関わりについての言及が乏しいので、より詳しい情報を得るため、防衛省関連資料（書籍・防衛省データベース）を基本に、太平洋戦争史における関飛行場建設事業の位置付けを探ることとした⁽²⁾。

(i) 建設時期について

防衛省データベースの中に関飛行場に関する一次資料は見当たらなかったが、終戦後発刊された『本土航空作戦記録』（第一復員局 1946）の中にその記載を確認した。この記録によれば、硫黄島失陥（1945.3）を受けて全国40か所に秘匿飛行場建設が次々と計画され、岐阜県には関と大垣に建設されたとある。ところが『関市史』には、1944年暮れから飛行場建設が始まったとはっきりと記されているし、防衛庁防衛研修所戦史室の『本土防空作戦』（1968）や『作戦基盤の建設運用』（1979）にも、陸海軍による捷号作戦（1944.7）、

決号作戦（1945.4）の示達により、秘匿飛行場の建設・運用が始まったと明記されている。『本土航空作戦記録』の記載は、誤記もしくは内容不十分な記載とみなすべきと考える。

（ii）捷号作戦と決号作戦

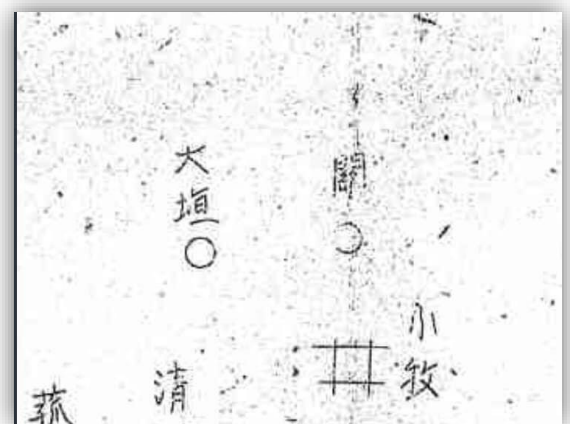
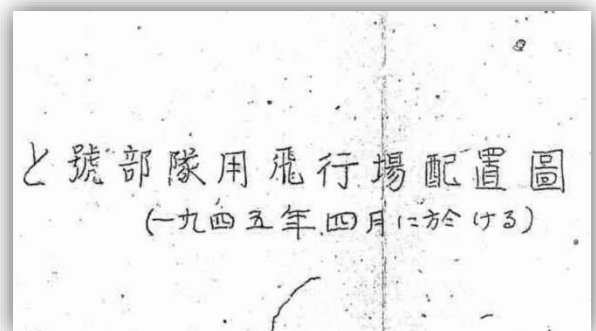
では、秘匿飛行場建設の背景となった捷号作戦、決号作戦とは何であったか。前掲の防衛研修所戦史室編纂の記録をもとに以下に略記する。

太平洋戦争緒戦の日本軍優勢はミッドウェー海戦（1942.6）を機に逆転し、さらにサイパン島失陥（1944.6）以後は本土攻撃の危機にさらされることとなった。陸海軍は本土・南西諸島・台湾・フィリピンを最後の国防要域とし、陸海空戦力を結集して抗戦するという捷号作戦を策定した（1944.7）。ところが、翌年3月に硫黄島が失陥、捷号作戦は失敗に終わり、陸海軍は捷号作戦に代えて決号作戦をただちに示達した（1945.4）。決号作戦の要諦は、千島・小笠原諸島・南西諸島・台湾などに米軍が侵攻した場合、できる限り抗戦して敵戦力を減らしつつ軍備を整え、本土で一大決戦を行うという漸減迎撃戦略にあった。

（iii）秘匿飛行場・特攻作戦用飛行場としての関飛行場

捷号作戦、決号作戦ともに遂行に当たっては航空兵力増強が重視された。同時に、敵襲に備え航空兵力を分散・秘匿することが急務とされ、そのために、全国各地に飛行場が建設された。こうした施設を秘匿飛行場と呼ぶ。航空兵力分散化のための飛行場建設は捷号作戦以前から始まっていたが⁽³⁾、本格化するのにはサイパン島陥落以降のことである。秘匿飛行場には滑走路や誘導路のほか、掩体・洞窟式倉庫・地下式司令部を整備するよう指示がなされていた。関飛行場建設に関する一次資料は見当たらなかったが、おそらくは捷号作戦のうち本州防衛に関わる第三号作戦によるものと考えられる（1944.10 示達）。さらにいえば、第三号作戦のうち遠州灘方面を担当する丁作戦に関わった可能性が高い。

関飛行場建設は、1944年12月の墓地移転・秘匿物資格納に始まった。翌年2月に本工事が開始され4月にはおおむね完了していた。現在の関市立田原小学校（当時は国民学校）に設営部隊本部が置かれ中部第4部隊が建設にあたった。兵士のほか、関町や周辺の農村部から千人単位での動員があり、現地指揮官には在郷軍人の渡辺鍵（かなえ）が就任した⁽⁴⁾。ところが、飛行場完成後の4月、硫黄島失陥を受け決号作戦が発令されることになったため、関飛行場は特攻基地としての性格を帯びるにいたる。捷号第三号作戦には航空部隊の役割として「主として敵輸送船団を多方面より挟撃するに努める」と記されているが、決号作戦には「敵機動部隊に対しては予め一部兵力を秘匿準備し機に投じ進攻せしめて其の跳梁を制す」「全軍特攻の戦法を敵に強要し、これを洋上に覆滅す」とあり、秘匿した航空兵力による特攻命令が全面に押し出されている（航空総軍決号作戦



「と号部隊用飛行場配置図」（部分）
『本土航空作戦記録』より

要綱)。この決号作戦に動員される特攻部隊の名称が「と号部隊」であり、前掲の『本土航空作戦記録』に掲載された「と号部隊用飛行場配置図」の中に関飛行場も明記されている（前頁写真上段・下段、ともに部分）。関飛行場が特攻基地としての任務を帯びるにいたった経緯を示す資料として貴重である。

(iv) 飛行場の実態

(1) 飛行機一貫生産と秘匿飛行場の関係性

岐阜県内には大垣にも秘匿飛行場があった。1942年以降、飛行機部品を製造していた東海航空株式会社大垣工場は、1945年に生産を拡充する。さらに「荒尾の松林に飛行場をつくり、飛行機を組み立てて一貫生産する計画もあったが、同年7月の空襲により工場は焼失した（『大垣市史』ほか）⁽⁵⁾。秘匿飛行場近くで飛行機の一貫生産を行う構想は、関飛行場でも進められていた。関飛行場から3キロほどの坂祝では、1944年4月に川崎航空機分工場が作られ飛行機部品製造が本格化した⁽⁶⁾。部品・翼・エンジン・燃料が分散秘匿されていたというから、大垣に同じく一貫生産を計画していた可能性が高い。周辺に燃料・弾薬・航空機を秘匿し、飛行場と生産工場が一体化した一大拠点を築くという関や大垣の在り方は、本土決戦に備えて戦力を分散秘匿する陸海軍の構想と一致する。

(2) 秘匿飛行場に関する作戦構想と現実の乖離

「昼夜にわたり果敢執拗な攻撃を反復し主として敵輸送船団を撃滅す」（捷三号作戦準備要項要旨）。このような陸海軍示達を可能ならしめるものは、一にも二にも充実した航空兵力である。しかし劣勢を挽回することはできず、陸海軍はついに決号作戦により「全軍特攻」を示達するにいたった。各地の秘匿飛行場では、敵襲による補給路遮断を想定した軍事物資秘匿が延々と続けられた。しかし肝心要の飛行機はどうであったか。関飛行場の場合、目撃証言によれば、たった1機か2機が、1日に1・2回程度離発着していた程度で、しかも7・8月にはほとんど飛ぶことがなかったという⁽⁷⁾。飛行場周辺に物資秘匿の地下壕は多く存在するが、飛行機格納の掩体に関しては形跡も証言もほとんどなく、配備が遅れていた可能性が高い。大垣の飛行機工場は飛行場とともに7月の大垣空襲で焼失し、坂祝も同じく7月に空襲を受けた。秘匿飛行場を拠点とした全軍特攻は、実行に移されたとしても戦局を好転させるものではなかった。

4 関飛行場の考古学的調査

『関市史』によれば飛行場付近に180余の地下壕があったという。我々は、地域の情報を頼りに踏査を続け、計14か所の地下壕を確認した。一帯の基盤層は凝灰質の砂岩・泥岩で非常に脆く砕けやすい⁽⁸⁾。聞き取りによれば、昭和50年代ぐらいまではあちこちに地下壕の入口がみられたそうだが⁽⁹⁾、今は大半が崩落してしまい場所すら確認できなくなっている。確認した遺構数は伝えられている数の1割にも満たないが、これらの遺構も近い将来姿を消すに違いない。我々は、現状の姿をできるだけ正確に記録に残すよう努めた。

(i) 司令部地下壕(第1号地下壕)と第10・11号地下壕

カナクズ山の山腹に奥行38mの規模の地下壕が残る。入口から中ほどまでは素掘であるが、中ほどから奥壁にかけてコンクリートで補強されていて、天井面には電線引き込み用と思しき金釘が打ち込んである。踏査した地下壕のうちコンクリートを用いたものはこの1基のみであり、地域住民の証言によれば、飛行場建設当時から「司令部」として知られていたという⁽¹⁰⁾。比較的残りのよい地下壕ではあるが、正確な記録を残すため、2021年4月18日、関市文化財保護センターの協力の下、司令部地下壕の測量を行った（測量図は資

料編に掲載)⁽¹¹⁾。司令部地下壕のある山腹から駆け上がった山頂付近には、盛土遺構、コンクリートの基礎、石積、通気口らしき金属製品が残る。司令部と関わる施設の痕跡であろう。このほか特記すべき遺構として、他の地下壕と比べ格段に大きかった第 10・11 号地下壕があげられる。ふたつの入り口を有するため、当初別々の遺構と判断したが、調査により、ふたつの横穴が最奥部で連結した地下壕であることが判明した。総延長 60m に達する遺構で、大規模倉庫以外にも司令部としての使用も可能な規模である。

(ii) その他の地下壕の現況

今回調査を行った地下壕のうち、第 2・3・4・5・8・9・10・11・12 号地下壕の岩石サンプリングを行った。場所によって砂質土・砂岩・泥岩が観察された。いずれも凝灰質であり火山噴出物に由来する。調査を行ったすべての地下壕で崩落がみられた。粒径が細かく手で割れるほどもろい砂岩や泥岩に、地下水が浸透したのが原因と考えられる⁽¹²⁾。

前掲の第 1、第 10・11 号の大型地下壕は特殊な事例であるが、他の地下壕はいずれも「横穴（洞窟）式倉庫」として掘削されたものである。いずれも崩落が甚だしく当時の規模を正確にうかがうことは難しいが、高さ・幅 1・8～2m 程度、奥行 5～10m 程度と推察する。掘削に際してはツルハシ（十字鍬）やタガネを用いており、明瞭な掘削痕が残る箇所もあった⁽¹³⁾。「やぐらを組みながら掘り進めていた」「入口には木枠と木の扉があった」との証言通り⁽¹⁴⁾、木枠はめ込み用の方形加工を入り口部分に施した遺構も見られた。

(iii) 滑走路

カナクズ山とその北辺に広がる平坦地は、太平洋戦争開戦前までは松林だった⁽¹⁵⁾。戦時中の開墾で農地として利用されていたが、1944 年暮れに始まる工事によって滑走路へと変貌を遂げた。目撃証言によれば「育ち始めていた麦をそのままローラーで転圧して農地を滑走路にした」とのことである⁽¹⁶⁾。東南東から西北西に向けて飛行機が滑走し、現在の青果販売施設付近で離陸し、田原小学校あたりで大きく旋回し南に向かったという⁽¹⁷⁾。

米軍の航空写真には、滑走路の北辺を画した道路がはっきりと写し出されている。香林寺の北辺から坂祝町方面にまっすぐ伸びるこの道路は生活道路として使われていたものであり、飛行場工事に伴って新たに作られた誘導路・運搬路ではないとの証言を得た⁽¹⁸⁾。

(iv) その他の施設

滑走路・地下壕以外の遺構としては、カナクズ山北麓の地下壕の前面に構築された方形土壇があげられる。土壇の北辺には小規模な突出部が作り出されている。性格は不明だが建物の基壇であったと考えられる。多くの飛行場に見られる掩体は、今回の踏査では確認できなかった。聞き取りや自治体史によれば、坂祝町黒岩方面にあったとされる。掩体に関しては今後の課題としたい。証言や自治体史によれば、物資秘匿場所は地下壕以外にもあった。学校やクラブ（公民館施設）、民家、寺社などの既存施設にも秘匿されたというし、山林の中にドラム缶が野積みされた事例もあった。前者の事例としては、田原・加茂野・蜂屋・富田の各国民学校、覚専寺・涼樹院・十二社神社・坂祝神社・津嶋神社・小松寺・香林寺・大雲寺・大通寺などの寺社、各地区のクラブがあげられる⁽¹⁹⁾。後者の事例としては、富加町内の林の中（『富加町史』）、香林寺境内の林の中⁽²⁰⁾、カナクズ山南麓の平坦地⁽²¹⁾などがあげられる。



秘匿地に使われた涼樹院（坂祝町深萱）

5 結びにかえて

本文で触れた通り、秘匿飛行場としての関飛行場建設の背景には、捷号・決号というふたつの作戦があった。このふたつの作戦は、内容において決定的な差を有する。捷号作戦は、サイパン島陥落により米軍による日本本土への爆撃や侵攻作戦が可能となったため、その阻止をめざし日本本土を防衛するために立案された作戦である。それに対し決号作戦は、硫黄島失陥により米軍の本土上陸作戦がいよいよ現実味を帯びてきたため、本土決戦を前提に敵兵力の漸減を狙って立案された作戦である。

作戦示達の文書には「敵輸送船団撃滅」「特攻機 1 万機で敵艦船千隻撃沈」「全面特攻」「全力投入」等の力強い文言が躍るが、当時の日本にはすでに作戦遂行に必要な資源さえも満足に残っていなかった。我々が行った調査でも弾薬や燃料はいろいろな場所に保管されていたことが確認できたが、前述の通り、掩体の形跡や情報はほとんどなく肝心の飛行機の配備が遅れていた可能性が高い。兵士や地元住民の多大な労力とともに完成した関飛行場は、終戦まで一切の「結果」も残さぬまま、人々の記憶から消えていくこととなった。

我々は、地上からも人々の記憶からも消えようとしている関飛行場の実態を、残された文献や考古資料の調査、当時を知る高齢者からの聞き取りにより復元しようと努力した。

活動を続ける中で、文献史学、考古学、聞き取り調査の3つの分野を同時に活用できたことは、太平洋戦争という比較的新しい時代を扱ったことが可能にしたことであり、郷土史研究を続けている我々にとっては、意義深い研究となった。

聞き取り調査や考古学のもつ可能性についても、肌身で感じることができた。聞き取り調査では、当事者の方々からの証言や裏付けが得ることが可能という強みを生かし、文献には記載されていない史実を確認することができた。また、考古学分野の調査では、土石崩壊によって埋まろうとしている地下壕の略測・現状確認・分布図作成などの作業を通じて、文献の記載内容や高齢者の証言が語る世界を、現地の遺構を前に考えるという貴重な体験をすることができた。

研究期間は 2021 年 1 月 31 日（情報入手）から 8 月 11 日（脱稿）にかけてのわずか半年間という短い期間であり、しかもコロナ禍により幾度かの研究中断にも見舞われたが、失われつつある歴史を追体験する日々の中で、我々はある種の「知的興奮」を覚えた。同時に、多くの人々に犠牲を強いる戦争への恐怖も感じた。さらには、先人の労苦を思い、平和への誓いを新たにするためにも、関飛行場の歴史の実態を正しく伝える必要があるとの結論にいたった。今後はより詳しい情報を入手することに加え、関飛行場の認知度を上げることと、現状残された遺構の記録・保全活動を課題としたい。具体的には、パンフレットや案内板製作の提案、地域の方々に向けた広報活動を実践する。

最後になるが、今回の研究に協力していただいたすべての方々に感謝の意を表し、本稿が関飛行場に関心を持ったの方々にとっての研究材料として活用されることを願いつつ筆をおきたい。



当時を知る方々と関飛行場にて記念撮影

2021 年 4 月 3 日

【引用・補注】

- (1)小川伸二氏（本校卒業生）の情報提供による。
- (2)参考にした自治体史及び防衛省関連資料に関しては、参考資料一覧を参照にされたい。
自治体史の記録のうち特に重要な記載に関して抜粋して資料編に付した。
- (3)防衛研修所戦史室書籍のほか、佐山二郎『工兵入門 技術兵科徹底研究』（2021）を参照にした。
- (4)工事着工と完成までの日程に関しては、自治体史記載と複数の高齢者の証言が一致した。聞き取りによる証言に関しては資料編にまとめて付した。
- (5)大垣市の荒尾南遺跡では、大垣空襲に際に投下された焼夷弾が出土している（『荒尾南遺跡調査報告書 AⅡ地区』2013、防衛省東海防衛支局『東海だより第3号』2009）。
- (6)本校の前身である武儀高等女学校、旧制武義中学校（現武義高等学校）の生徒が、分工場に動員された。
- (7)聞き取りに参加した複数の方々の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (8)地質学的な知見は、石田朗氏（本校）と竹中諒氏（岐山高等学校）のご教示を得た。
- (9)聞き取りに参加した多くの方々の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (10)坂井修氏の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (11)伊藤聡氏、森島一貴氏（関市文化財保護センター）のご協力を得た。
- (12)石田朗氏、竹中諒氏のご教示による。
- (13)佐山次郎前掲書を参照。
- (14)小川信夫氏の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (15)坂井修氏、小川信夫氏ほかの証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (16)坂井修氏の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (17)小川信夫氏の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (18)聞き取りに参加した複数の方々の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (19)聞き取りに参加した複数の方々の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (20)坂井修氏の証言による（資料編・聞き取り調査）。
- (21)吉田常三郎氏の証言による（資料編・聞き取り調査）。

【引用・参考文献】

<自治体史・郷土史関連>

- ・『関市史』（1967） ・『新修関市史 通史編』（1999） ・『坂祝町史 通史編』（2005）
- ・『坂祝村誌』（1955） ・『美濃加茂市史 通史編』（1980） ・『富加町史 通史編』（1980）
- ・『大垣市史 通史編近現代』（2013） ・『関市立田原小学校百周年記念誌』（1972）

<防衛省関連資料>

- ・防衛庁防衛研修所戦史室『本土防空作戦』朝雲新聞社（1968）
- ・防衛庁防衛研修所戦史室『陸軍航空作戦基盤の建設運用』朝雲新聞社（1979）
- ・防衛研究所史料閲覧室 http://www.nids.mod.go.jp/military_archives/catalog.html

<関高等学校公式ウェブサイト>

- ・「関ブリッジジャーナル第4号」（2021）

https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r03/2021_sbj_04.pdf

【資料編・文献】

＜自治体史記載の抜粋＞

・『関市史』（1967）664頁 「…この昭和19年、食料増産のため西田原字佐賀理の原野13～14ヘクタールを開墾して耕地整理が行われたが、陸軍において飛行場の爆撃を避けるための分散化が図られ、同年暮れより関町周辺の町村から弁当持ちの勤労奉仕隊が毎日千人以上動員され、ここに双発飛行場の陸軍飛行場造りが行われた。字佐賀理の南、大杉字カナクズ山の北部に百八十余の横穴をつくり司令部・無線局・兵舎・各種倉庫がこれらに考えられて、山麓の墓地は数日前の死体も掘り返して作るというありさまで、昭和20年4月に飛行場の完成を見たが、軍事上「関牧場」と称され、雑草の種を播いたため付近の農作物に大被害を受けた。ここに双発飛行機が発着し始めたが、空腹にあえぐ兵隊の付近農家への食料乞いも頻繁で批判が高かった。」

・『坂祝町史 通史編』（2005）162～163頁 「…12月、軍は兵器疎開のために部落のクラブに秘密裏に兵器器具を格納した。勝山クラブに飛行機の発動機を充満、酒倉大針のクラブに飛行機用の部品。其の他村内の民家倉庫に多数の被服・燃料・工作器具・食料品・日用器具、小学校校舎に莫大な医療薬品、神明神社社務所に爆弾等を格納したのであった。…昭和20年2月から深萱北野に飛行場建設工事、飛行機用燃料其の他の油入ドラムカンを隠匿のために深萱・黒岩・勝山の中腹に無数の堀壕が始まった。黒岩には飛行機の格納の建設、深萱十二社神社付近の山には地下室構築、これが為に東海第一部隊の将兵が小学校の十教室に入って駐屯した。23日より覚専寺・涼樹院・十二社神社・坂祝神社其の他の民家にも入った。農業会に本部をおいてこれら将兵の作業隊兵は昼夜交代で工事に邁進した。朝鮮人も徴兵されて一ケ中隊ばかり来た。戦いもいよいよ熾烈を極め本土上陸との噂に作業進行せんために軍部は、部落民を強制的に幾日も徴兵して此の作業に酷使した。若いもの壮年の者は応酬されて少ないので老人や婦女子迄が、お国のためだ勝たねばならぬ、の合い言葉で出役した。…必勝を期して張り詰めた心も敗戦となって、進駐軍の命令で各山腹に隠匿してあった莫大なドラムカンは各所に集積最後に黒岩姥ヶ池の北の広場に山積みして引き渡し、飛行機の発動機は木曾川原で焼却、大建工場にあった飛行機の翼などは、全部進駐軍のために破壊された。其の他クラブ民家等に格納してあった物資は終戦のドサクサまぎれに行方不明になった物も莫大であった。」

・『美濃加茂市史 通史編』（1980）895頁 「この頃には、加茂野小学校などに軍隊が駐屯し、稲辺山のふもとには飛行場が作られた。」

・『富加町史 通史編』（1980）607頁 「都市の空襲により物資の焼滅を避けて軍需品は勿論、日用品・雑貨等の物資を山村へ疎開することとなり、当町でも神宮寺山裏をはじめ各部落の山や林の中にドラム缶やトタン板等が野積されていた。」

・『田原小学校開校百年誌』（1972）48～49頁 「(1945年)2月8日 中部第4部隊・校舎使用を始める。…この日設営隊が到着、2月15日日本隊宿営開始、4月1日中部118部隊本隊と交替、5月2日石井隊と交替、6月4日板垣隊と交替、9月1日板垣隊の引揚げで、兵舎としての使用は終わったが、2月15日の記録には「中部第4部隊到着、本日より宿営のため講堂、北校舎上下、中校舎西3教室を開放貸与し、児童は南校舎と中校舎東半分にて2部授業をなす。為に軍部並びに挺身隊員の出入多く校庭も殆ど使用し得ざるに至る」と記されている。」

・ 関高校(旧制武儀高等女学校)同窓会事務局に残る情報

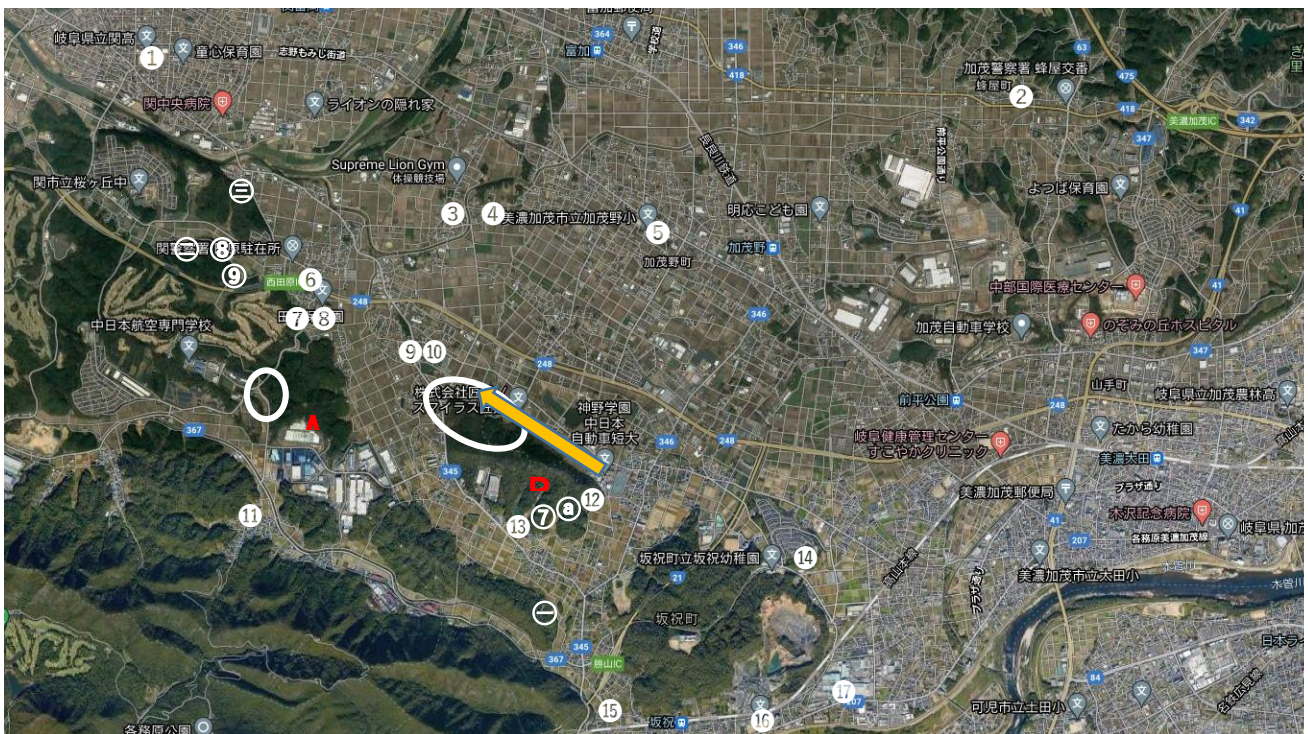
昭和 19 年 3 月、中学生以上の勤労働員大綱の決定。7 月より実施。本校では、昭和 19 年 7 月、川崎航空機各務原本工場、同富士分工場、同朝日分工場、関精密工業会社、関刃物会社、東濃航空美濃工場に動員。昭和 19 年 9 月、特殊防空気球(風船爆弾)の原紙製造開始(学校行動にて)。昭和 20 年 2 月、美濃町大和化学工作作業所、桜井紙工松森工場、川崎航空機坂祝分工場(本工場の一部疎開、配置転換)に動員。昭和 20 年 5 月、学校工場開始(川崎工場より疎開)。昭和 20 年 8 月 21 日動員解除。

・『大垣市史 通史編近現代』(2013) 450 頁 「荒尾林に飛行場を作り、飛行機を組み立てて一貫生産する計画があったが、同年(1945年)7月の空襲により工場が焼失した」。

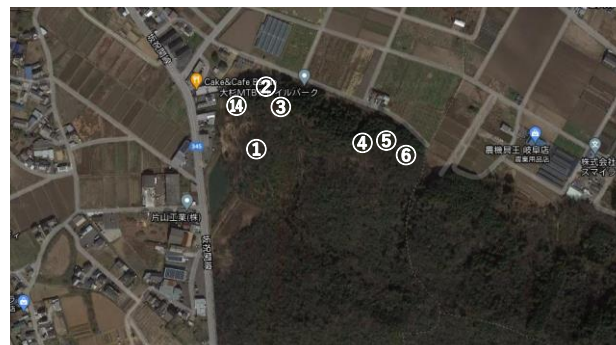
【資料編・考古資料】

関飛行場とその関連施設の関係地図(Google Earth より作成)

自治体史の記載、高齢者の証言、遺跡踏査により確認できた飛行場とその関連施設。黄色い矢印が滑走路跡。南の丘陵がカナクズ山。カナクズ山北西部では地下壕が複数確認できた。



楢円 A 拡大図



楢円 B 拡大図

既存施設を利用した施設一覧表(地図記号は白地○)

番号	施設名	場所
①	関高等学校 (高校所在地)	関市桜ヶ丘
②	蜂屋小学校 兵舎・倉庫に利用	美濃加茂市蜂屋町
③	東田原クラブ 倉庫に利用	関市東田原
④	大通寺 兵舎・倉庫に利用	関市東田原
⑤	加茂野小学校 兵舎に利用	美濃加茂市加茂野町
⑥	西田原クラブ 倉庫に利用	関市西田原
⑦	小松寺 倉庫に利用	関市西田原
⑧	田原小学校 兵舎・倉庫に利用	関市西田原
⑨	津嶋神社 倉庫に利用	関市大杉
⑩	香林寺 倉庫に利用	関市大杉
⑪	大雲寺 倉庫に利用	関市挾間
⑫	十二社神社 倉庫に利用	坂祝町深萱
⑬	涼樹院 倉庫に利用	坂祝町深萱
⑭	坂祝神社 倉庫に利用	坂祝町酒倉
⑮	覚専寺 倉庫に利用	坂祝町勝山
⑯	坂祝小学校 兵舎・倉庫に利用	坂祝町取組
⑰	飛行機工場 (現三菱パシエロ)	坂祝町酒倉

地下壕一覧表

番号	施設名	状態	高さ×幅×奥行 (c m)	場所
①	地下壕 1	一部コンクリートを使用	200×250×3800	関市大杉
②	地下壕 2	奥の天井部が崩落 泥岩	211×220×600	関市大杉
③	地下壕 3	掘削痕が残る 砂質土	200×200×800	関市大杉
④	地下壕 4	崩落 砂岩		関市大杉
⑤	地下壕 5	崩落 砂岩		関市大杉
⑥	地下壕 6	崩落		関市大杉
⑦	地下壕 7	安全管理のため閉鎖	不明	坂祝町深萱
⑧	地下壕 8	入口の加工、掘削痕がよく残る 砂岩・泥岩	250×230×1050	関市小迫間
⑨	地下壕 9	内部は長方形 砂岩・凝灰岩	未調査	関市小迫間
⑩	地下壕 10・11	入口が2つあり奥で連結する 砂岩・泥岩	横穴部 190×200×1500	関市迫間
⑪			連結部 190×274×3040	
⑫	地下壕 12	崩落 砂岩		関市迫間
⑬	地下壕 13	崩落		関市迫間
⑭	地下壕 14	崩落 砂室土		関市大杉

㊟	推定地下壕 1	未調査 聞き取りの証言		坂祝町深萱
㊟	推定地下壕 2	未調査 聞き取りの証言		関市小迫間
㊟	推定地下壕 3	未調査 聞き取りの証言		関市西田原

※地下壕は私有地にあるため、現地調査にあたっては地権者の承諾を必要とする。

※現存する地下壕はいずれも土砂崩れや天井部崩壊が激しく立ち入りは危険である。

野外秘匿地と掩体(?)

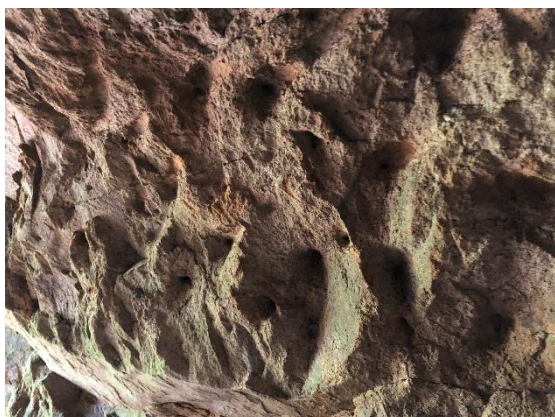
番号	施設名	形状	縦×横 (c m)	場所
㊟	野外秘匿地	掩体と誤認 半円形で平坦	1000×2050	坂祝町深萱
㊟	掩体?	不定形で平坦	2640×1870	関市迫間

※㊟については掩体の可能性を想定したが、証言により野外秘匿地であることが判明した。

建物址

記号	施設名	形状	縦×横×高さ (c m)	場所
	方形土壇	土盛りされた建物の基壇	680×1190×250	関市大杉

関連施設の写真・図版



第 1 号地下壕 (司令部跡)。奥から入口を撮影 (上段左写真)。測量の様子 (上段右写真)。壁に残るタガネ痕 (下段左写真)。下段右は第 8 号地下壕に残る十字鋏 (ツルハシ) 痕。

関連施設の写真・図版



上段左は第 8 号地下壕。奥から入口を撮影。入口部分を方形に整え木枠や戸をはめた様子がよくわかる（目撃証言あり）。上段右は第 10・11 号地下壕。総延長 60m に達する。中段左はカナクズ山北西部地下壕の略測の様子。中段右は理科教諭の指導による地質調査の様子。下段現地責任者として飛行場建設の指揮にあたった渡辺健（かなえ）の遺品。ご遺族の提供による。双眼鏡は日本工学工業（現ニコン）のモナーク。陸軍将校用の官給品として生産された。モナークのブランド名は今もニコンで生産されている。軍刀も将校用の拵えで作られている。

第1号地下壕(司令部跡) 測量図 1/200



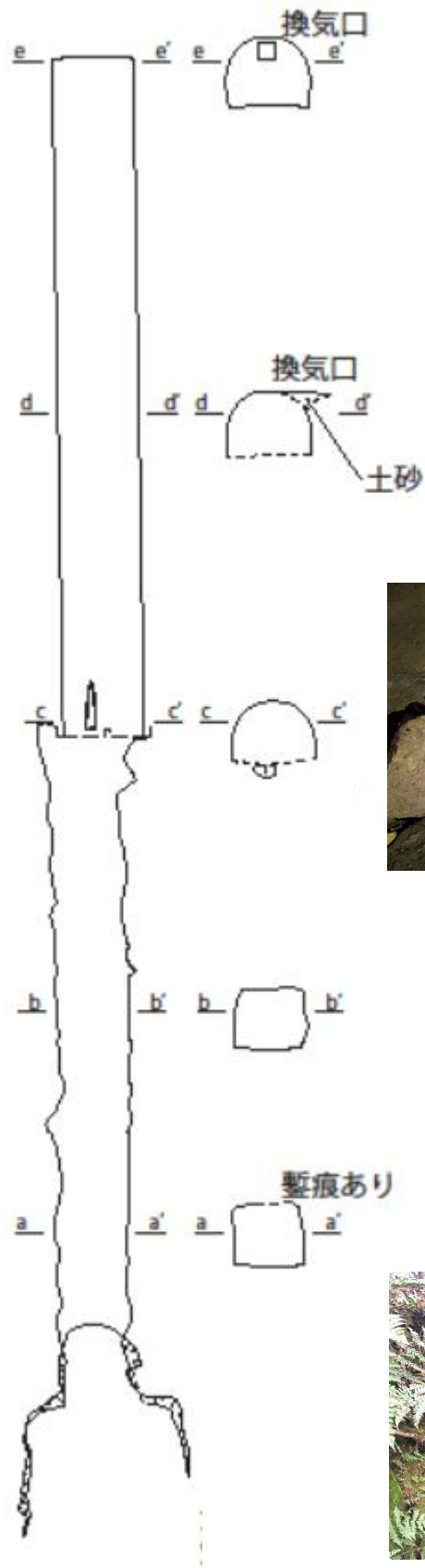
コンクリート舗装の状況



素掘・コンクリート接続部分



素掘部分の状況



奥壁 換気口



排水溝・排水管



入り口部分

【資料編・聞き取り調査】

当時を知る方々の貴重な証言を紹介する（年齢は2021年7月31日時点）。聞き取りのための会合は、2021年4月3日、小川信夫さんの呼びかけで、関飛行場滑走路跡地に作られた広場で約2時間にわたって行われた（下写真）。この機会とは別に、小川さんからはお話をうかがう機会を得た。

坂井修さん(90歳)

- ・当時の香林寺は今よりも広く、そこにあった林の中に、飛行機の燃料等を隠していた。
- ・農作物で飛行場を偽装していた。
- ・丸太を組んでやぐらを作り、地下壕を掘り進めた。この2つは同時進行で行われた。
- ・昭和19年の暮れ、飛行場建設に先立って墓の移転を行った。墓は、現在のふる里農園付近にあった。
- ・当時は飛行場付近ではテントを用いていた。一軒家を建てると敵にばれてしまう恐れがあったから。
- ・香林寺や津嶋神社の林には、飛行機の資材が隠してあった。竹製の桶（代用ドラム缶）もあった。あの当時の建物で残っているのは津嶋神社の拝殿だけだと思う。
- ・大杉地区一帯は松林だった。戦時中の開墾で農地になった。坂祝町の黒岩までに民家はなく、ずっと畑だった。
- ・滑走路工事の時、ローラーで10～15cmほどに伸びた麦を転圧。偽装のため、伸びてくる麦はそのまま。地面はローラーで硬くした（『関市史』には、偽装のために雑草の種を蒔いたとの記載あり）。
- ・地面がむき出しの滑走路なので、プロペラが回り始めると土煙で飛行機が見えなくらいだった。
- ・カナクズ山には地下壕が掘られ、1つは司令部地下壕だった。中はコンクリートと聞いているが実際に入ったことはない。カナクズ山は資材置き場としても使われていた。
- ・カナクズ山は松山で当時から大杉地区の入会地だった。マツタケが取れ、松葉は燃料になった。
- ・カナクズ山の由来については、山から流れる谷水に多くの鉄分が含まれていて、周辺の用水や田んぼに赤さびた鉄分がたまっているからだと思う。
- ・坂祝方面でも様々な軍用施設が作られていると聞いたが、そちらに出かけると叱られるので何があったのかはまったく知らない。

井戸淳次さん(89歳)

- ・父親は昭和15年に死去した。飛行場造成の際、墓地移転の命令が下った。母親が父親の遺骸を備中鍬で掘り出しリヤカーに乗せて遺骸を運んだと聞いている。墓の移転は昭和19年暮れ。当時は子どもだったので、自分自身は墓移転の手伝いはしていない。



・飛行機が飛ぶ姿は1日に2、3機ほどを見かけたただけだった。結局、関飛行場は本格的には使われなかった。

・兵士たちは寺社に宿泊し、伍長や軍曹は民家の風呂を利用した。

河村釣さん(88歳)

・大雲寺の2階には機関銃が保管されていた。自分は見た。ひまし油やメチルアルコール、カーバイドなども保管されていた。戦後、カーバイドは魚取りに使った。メチルアルコールを飲んで失明した人、死んでしまった人もいる。

・農繁期には兵士が農作業を手伝った。兵士が家にもやってくるのでシラミをうつされた。シラミ退治のために洗濯物を煮たが、学校でシラミがついていることを友人に指摘された。

小川信夫さん(87歳)

・ドラム缶の代用品として和紙を貼った竹製の桶が使われていた。

・当時の軍事教練では、女子はなぎなた、男子は剣道の竹刀を使うことになった。

・防諜のため、飛行場であることを隠し、牧場(関牧場)を作るとの触れ込みであったが、設営当時から飛行場であろうとのうわさがあったため、なんとなくは知っていた。

・兵士の半分は飛行場造成にかかわった。周辺の村々や当時の関町から、一日1000~2000人が動員され、これに加わった。兵士の半分は、周辺に配置された地下壕の掘削に動員された。

・飛行場予定地には墓地もあった。移葬指示の数日前に埋葬した遺骸も掘り出した。

・4月ごろから陸軍の双発機が飛ぶようになった。南南東から北北西に向かって滑走・離陸した。6月ごろまで1日当たり1、2回程度飛んでいたが、7、8月あたりはほとんど飛んでいない。

・飛行場周辺の集落の山間に、燃料や爆弾を秘匿する地下壕がたくさん掘られた。自分の通学路でも兵士が掘っているところを見かけた。見張りの兵士が立っているので叱られないように通った。

・兵士たちは国民学校を宿所として、近隣の農家の風呂を交代で利用した。自分の親が、煎った大豆やメリケン粉で作った塩味の団子をふるまうと兵士は喜んだ。

・田原国民学校は白壁だったが偽装のため墨汁を塗った。学校を宿舎としていた兵士たちは朝の訓練を行っていた。朝鮮半島出身の初年兵が、言葉(日本語)をうまく使いこなしていないという理由で、青竹が割れるほどに背中を殴られ血を流しているところを見かけた。子どもながらにひどいことをするものだと思った。

・兵士たちが荷役に使う牛を家で預かって飼育した。戦後、その牛は払い下げを受けた。

・昭和20年1月、岐阜の歩兵第68連隊が飛行場設営にやってきた。田原国民学校の教室の半分を宿所とした。4月には飛行場が完成した。

※ 『坂祝町史』には「東海第一部隊」「朝鮮人による一個中隊」が、『田原小学校開校百年誌』には「中部第4部隊」「中部118部隊」が派遣されたとの記載がある。

※ 小川さんの記憶では飛行機は双発機であったいい、自治体史にも双発機との記載がある。坂井さんほかの記憶では単発機も飛んでいたという。

今瀬正義さん(87歳)

・東田原にあったクラブ(今でいう公民館)に武器関連のものが隠されていた。

・B29を追いかける戦闘機用に松から松根油がつくられた。

・団旗を掲げ、団歌を歌って集団登下校した。

- ・学校は兵隊さんが来てから分散授業となった。教科書についても、1人1人新品を買わずに先輩が使っていたものを受け継いで使っていた。
- ・運動場をサツマイモ畑にしていた。時には落ち葉や肥料として使えそうなごみを集めるという勝負をやっていた。
- ・薪がもったいないので、風呂は2～3日に1回だけ。水汲みは子どもたちの仕事だった。
- ・あちこちのクラブに軍事物資が秘匿されていた。戦後、父親が進駐軍の指示で秘匿物資の一部を焼いた。何か知らないがチカチカと光るものだった。
- ・大通寺には、15～26人くらいの兵士がいた。仕事を終えた兵士たちが、元気に軍歌を歌いながらあぜ道を通って帰る姿や、その後ろを引綱のない馬がついていく姿を覚えている。

横山安雄さん(87歳)

- ・昔の棺桶（座り棺）は材質が悪かったので、遺体が腐る前に壊れた。墓移転の時には、体液が垂れる遺体を備中鍬で引き上げた。

吉田常三郎さん(86歳)

- ・学校では「B29 来たら竹やりで突け！」と指導が入っていた。
- ・西田原の西山の地下壕にエンジンオイルが隠されていた。終戦後、村人たちが協力して荷車で運び、みんなで一升瓶に小分した。自宅にはその時のドラム缶オイルがあった。
- ・昭和 20 年の大晦日、深萱の涼樹院付近の地下壕で信管を拾った。持ち帰って自宅で遊んでいると、落としてしまい爆発した。自分だけでなく、周りにいた子どもの身体にも破片が刺さるなどの被害があった（5人くらい）。自分は右手首を失い、父親に止血のため手首と腕を縛られリヤカーで医者の方まで運び込まれた（吉田観音近くの太田医院）。

※ 吉田さんが信管を拾った地下壕は、坂祝町深萱に今も残る（第 7 号地下壕）。地下壕の所在する谷筋には半円形の平坦地があり、当初は掩体の可能性を想定したが、吉田さんの証言によりドラム缶などを野積みした野外秘匿地であったことが判明した。

石原太津夫さん(85歳)

- ・当時小さいながらも、墓地移転のことは記憶している。
- ・飛行場あたりに、レーダー探知を妨害するためのチャフ（銀紙）が空から降ってきたので拾って遊んだ。

栗倉玄臣さん(75歳)

- ・滑走路を偽装するために作られた車輪付きの小屋 2 棟が、戦後もそのまま農地に置かれていた。車輪は飛行機のタイヤを転用して使っていた。偽装のための小屋であるということは父親から聞いていた。タイヤをさわると硬かったことを記憶している。

※ 栗倉さんは戦後生まれであるが、地域のことに詳しく貴重な情報もご存知なので今回参加していただいた。



関飛行場からほど近い富加町の松井屋酒造に保管されている戦闘機飛燕のタイヤ。終戦後、当時の松井酒造の当主が、各務原飛行場からの払い下げ品を農協から購入し、荷車のタイヤとして使用していたという。栗倉さんの記憶に残る移動式小屋の車輪も、ちょうどこのような飛行機のタイヤであったと考えられる。

聞き書き・風船爆弾 ～戦時下の武儀高等女学校第24期生～

林 直樹（関高等学校地域研究部顧問）
武義高等学校 平成18年度3年7組一同

はじめに

岐阜県美濃市の特産品・美濃和紙は、太平洋戦争中の日本軍の秘密兵器・風船爆弾（特殊防空気球）の素材として使用されたことでも知られる。気球生産にあたっては、武儀高等女学校（現在の関高等学校の前身、以下武儀高女と略）の生徒が動員されたというが、その実態はどうであったのか。当事を知る方々から聞き取りを行うのが一番と考え、2006（平成18）年、当時勤務していた武義高等学校の3年7組の生徒ともに、武儀高女24期生の方々4名からお話をうかがう貴重な機会を得たが、その後成果を発表することもなく15年の歳月がたってしまった。

現在、関高等学校地域研究部では、大戦末期の秘匿飛行場の研究を継続中であり、『関高等学校地域研究部研究報告』本号はその特集号でもある。この機会に、気球生産に関する聞き取りの報告を本誌に掲載し、地域における戦争体験の記録をできるだけ詳細に残しておこうと考えた。あわせて、調査に協力していただいた24期生4名の皆様のご厚意、聞き取りに参加してくれた武義高生の諸君の努力に報いたい。

本稿では、まず第一部で風船爆弾の概説を試み、続く第二部に聞き取り調査のまとめを掲載した。関心・必要性に応じてお読みいただきたい。風船爆弾に関しては、以下の2冊を参考にした。本稿と合わせて一読されることをお勧めする。

吉野興一『風船爆弾・純国産兵器「ふ」号の記録』朝日新聞社 2000

竹内孝夫『こんにゃくの中の日本史』講談社現代新書 2006

第一部 風船爆弾について

1 風船爆弾とは何か

風船爆弾とは、正式には「ふ」号兵器といわれる特殊兵器で、米国本土を直接空襲することを目的として作られた爆弾搭載の気球を指す。1944（昭和19）年11月から翌年の4月にかけて、陸軍放球部隊により、爆弾を搭載した直径10メートルほどの気球が千葉県一宮海岸、茨城県五浦海岸、福島県勿来の各海岸から次々と放球され、上空のジェット気流に乗せて米国本土に向かって飛ばす作戦が実行に移された。ジェット気流とは、亜成層圏に位置する強い偏西風のことである。晩秋から冬にかけて、太平洋の上空8000～1万2000メートルほどの亜成層圏には、最大秒速70メートルほどの風が吹く。この気流に乗れば、米国本土までわずか2～3日ほどで到達する。風船爆弾の人的被害はオレゴン州の死傷事件（6名死亡）が唯一の事例である。これ以外は、送電線破損事故や山火事を起こした程度でいずれも軽微なものであった。

2 風船爆弾の仕組み

高度が高くなれば当然気圧が下がるので気球は膨らむ。充填する水素ガスを6分目ほど

にしておく、気球は高度 4500 メートル付近でパンパンになる。気球はさらに上昇を続けながら高度 1 万メートル付近で高度保持装置によって高度を一定に保つようになる。

その時点で気球に搭載できる物体の重量は、試算によれば 182 キログラムであったから、軍は投下する爆弾・焼夷弾の重量を 35 キログラムまでと決定した。爆弾・焼夷弾以外に、高度保持装置、バラスト用の砂袋、自動投下装置、自爆装置を積み込まなければならなかったからである。

当然ながら夜間走行中には、気温低下にともなう気圧の低下によって、気球内の水素が次第に減っていくので気球高度は下降していく。気球に取り付けられた高度保持装置には、高度下降を気圧変化で感知すると電子回路に信号が送られ、ひとつの重さが 2・5 キロほどの砂袋が自動的に落ちる仕掛けが仕組まれていた。積み込まれた砂袋は合計 30 個。当然、砂袋を落とすと気球は再び上昇する。試算によれば、最後の砂袋を落とすとそこはすでに北米大陸のはずだった。最後の砂袋が落とされると、積み込まれた爆弾・焼夷弾も自動的に投下され、さらに気球の残骸や痕跡を残さないように導火線で気球に装着された自爆装置に着火し、気球を完全に燃やして証拠隠滅してしまう仕組みも付けられていた。

3 風船爆弾の製造過程

風船爆弾の気球部分には、ゴムや石油製品ではなく、楮の和紙とこんにゃく製の糊が使用された。和紙・こんにゃくの組み合わせは、純国産素材であると同時に、気密性・耐久性において、ゴム引き布や合成樹脂、各種油脂よりも優れていたからである（第九陸軍技術研究所による実験）。和紙・こんにゃくの気球紙の性能の良さは、米軍の実験でも証明されている。実験によれば、日本の気球紙の水素漏洩率は、当時の米軍が使用していた気球用のゴム引き布のわずか 10 分の 1 に過ぎなかった。

とはいえ、球紙生産は厄介で手間のかかるものであった。薄く漉きあげた和紙に気密性を高めるためにこんにゃく糊を塗り、こんにゃく糊を含浸させた気球紙を 5 枚ほどこんにゃく糊で接着したのち、さらに苛性ソーダ液で不溶処理し、グリセリンで柔軟加工してやっと完成するほどの面倒な代物である。

こんにゃく糊といっても一様ではない。紙に成分を含浸させるための糊と、紙と紙を接着させる糊とは粘度が違っていて、当然前者は後者に比べて薄めに作ってあるから粘り気が弱かった。こんにゃく糊には、青空と区別しにくくなるように、空色の塗料が混ぜ込んであったので気球の仕上がりは空色であった。一種の迷彩塗装である。

紙を 5 枚貼り合わせたというと薄い素材を想像しがちであるが、実際の気球紙は厚さ 2 センチほどあった。接着用のこんにゃく糊はかなり分厚く塗布されたということである。

「和紙で作った風船爆弾」というイメージにとらわれると、気球紙の主要素材は和紙であり、こんにゃくは補助的役割を果たしたに過ぎないと思ってしまうのだが、視点を変えると、この気球紙の主役はこんにゃくであって、和紙は可塑性に富むこんにゃくを補強してかたちをととのえるための外皮・芯であった。

直径 10 メートルの気球に使用された和紙は、大型紙（66×193 センチ）と小型紙（67×97 センチ）の全部で 600 枚ほど。その生産には気の遠くなるような人海作戦が展開されていた。初期には能率を上げるため、気球紙生産を機械で実施しようとしたらしいが、うまくいかなかったという話も残されている。だからこそ全国各地で女学生が動員され、手作業で貼り合わせが行われたのである。やがて日本クロス工業（現在のダイニック）が気球

紙生産の機械化に成功、一連の機械で手作業 1 万人分の生産性をあげたという。こうしてできあがった気球には水素ガスが充填された。水素ガスは昭和電工川崎工場や横浜工場生産され、トラックや貨車で放球基地まで運ばれた。

4 気球の生産と女学生の動員

気球紙とこんにゃく糊の生産はすでに 1943（昭和 18）年に始まっていた。美濃以外でも福井県や高知県、愛媛県、埼玉県などの和紙の主要産地で、気球紙生産は行われた。

薄く仕上がった気球紙をこんにゃく糊で貼り合わせる作業には、全国の女学生が動員された。できあがった気球紙を裁断し、気球型になるよう貼り合わせていくのも女学生の仕事であった。この作業については、「指先が割れて血がにじむ」「指紋がすれて消えてしまう」くらいつらいものであったとの証言が関係者から多く得られている。こうして各地で生産された気球は東京まで運ばれた。東京では日劇や国際劇場、東京宝塚劇場、国技館などで観客席をはずして気球製作が行われていた。コンプレッサで空気を入れての漏洩実験や、水素ガスを充填しての浮揚実験のためには、高い天井が必要だったからだ。

第二部 聞き取り調査の記録

1 武儀高女 24 期生の方々との出会い

気球生産に携わった当時の女学生の方々を探すに当たっては、佐藤紫先生（関高等学校教諭、当時）にお世話になった。聞き取り調査に協力していただいたのは、山田礼子さん、深尾玉枝さん、手嶋敏子さん、後藤はるみさんの 4 名である。皆さんともに武儀高女第 24 期生で、昭和 5 年（ないし 6 年）生まれである。武儀高女の前身は関町立実科高等女学校である。1923（大正 12）年、県立に移管され武儀高等女学校となった。1920（大正 9）年創設の武義中学と並ぶ中等教育機関として、中濃地区を中心に、県内外に多くの人材を供給したことで知られる。現在の関高等学校はその後身にあたる。24 期生の方々は満州事変前に生まれ、日中戦争の年（1937）に小学校に入学、5 年生の時に太平洋戦争（1941）に突入し、女学校 3 年生で敗戦（1945）を迎えるという、波乱に満ちた幼少期・青春期を経験している。

聞き取りは 2006 年 7 月 27 日と 8 月 9 日の 2 回にわたって武義高等学校内の梅華塾第一研修室で行った。両日ともに蒸し暑い日であったが、24 期生の方々は武義高生の質問にていねいに答えてくださった。以下にその時の聞き取りの内容をまとめておく。4 名のみなさんは、たがいの記憶を確認しすり合わせながら語ってくださった。個々の話題を特定の個人名と結び付けて記録しなかったのはそのためである。ご了解願いたい。

2 気球紙生産のはじまり

気球紙生産に従事したのは、昭和 19（1944）年から翌 20（1945）年にかけてのことだった。校舎で勉強したのは 1 年生であった昭和 18 年（1943）までで、そのあとは終戦まで食糧増産のための開墾作業や気球紙生産、日本刀（軍刀）生産に従事した。

動員が始まってから終戦を迎えるまで、机に向かって勉強した記憶はほとんどない。気球紙生産のために学徒動員された学年は自分たち 24 期生までで、その下の学年は関わっていない。だから気球紙生産のことを話せるのは自分たちが最後の世代だと思う。

終戦後にやっと授業が再開したが、教科書は新聞紙を重ねたような粗末なもので、しかも墨塗りばかりであった。今の若い人たちの学生生活とはずいぶん異なる生活を送っていた。

当時の武儀高女は、1クラス70名以上で1学年に3クラスあった。今の関市・美濃市だけではなく、国鉄越美南線で加茂郡方面から通ってくる人もいた。女学校は4年制で、今の教育制度にあてはめると、中学1年生から高校1年生までの期間に相当する。一方、同時期の男子中学（現在の武義高）は5年制（現在の高2まで）であった。

当時の武儀高女の校舎は、現在の関高校の場所（関市桜ヶ丘）にはなく、安桜山の東側、今の本郷町あたりにあった。最初は学校の講堂で気球紙生産の作業を始めた。作業が昭和19年のいつ頃始まったかは覚えていない。どのような経緯で気球紙製作がはじまったかも覚えていない。当時は学校でいわれるままに、まるでロボットのように開墾事業や奉仕作業に駆り出されていたので、いちいち覚えていないのだと思う。

作業の内容が風船爆弾に使用する気球紙の製作であることは知らされていたが、それ以上のことは軍事機密だったので教えてもらっていない。ただ、「こんなものが本当に飛ぶのか」とかすかに疑問に思った記憶はある。しかしそんなことは絶対に口に出せなかった。

気球紙を作っていたのは全国でも自分たちだけなのだろうと思っていたが、終戦後、何かの機会に、他の地域でも風船爆弾を作っていたこと、いくつかアメリカまで飛んでいたこと、飛ばす際に爆破事故が起きて人が亡くなったことなどを聞いて驚いたことがある。当時は風船爆弾について詳しく知ろうにも機密重視だから詮索することなど許されなかったし、「批判を口にする者は非国民」という当時の風潮からして、聞こうとも思わなかった。自分たち自身、物心ついた時から戦時体制であったから、そういった考え方が自然と身に付いていた。不自由・忍耐が当たり前だったから、自由が許される今の社会とはわけがちがった。

3 気球紙生産の日々

本郷町の校舎で作業を行ったのは昭和20年の2月前までのこと。作業場に使っていた講堂が狭かったし、校庭も狭く気球紙の天日干し作業が十分にできないので、2月からは美濃製紙工場（美濃市千畝町、現在のイオンタウン美濃）に製作場所が移動した。自分たち女学生も美濃製糸工場まで通うことになったが、一部の女学生は本郷町の校舎に残り、そのまま作業を続けていたと聞いている。

関方面から美濃町までは越美南線の貨物列車に乗せられて通った。貨物列車には客車のようなステップがなく、プラットホームまで相当の段差があった。無理に飛び降りて下駄を割ってしまった人もいた。友達とはいいいもので、割れた下駄を手ぬぐいでしばって直してくれた人もいた。

気球紙製作は4人ぐらいが1グループとなって行った。畳1畳ほどの作業台の上に大きな和紙を広げ、そこに20~30cmほどの大きな刷毛でこんにやく糊を塗った。糊をたっぷり含んだ刷毛はとても重く重労働だった。

冬場の作業は寒くつらかった。特にこんにやく糊の冷たさは、当時の記憶があいまいになってきた今日でもはっきりと記憶している。同窓生が出会った時に、そのころのことが話題にのぼると、みな一様にその時の冷たさのことを口にするほどである。

糊には粘り気の強いものと弱いものの2種類があって、最初に弱いほうを塗り、次に強

いほうを塗った（注1）。糊はどちらも同じ空色をしていた（注2）。刷毛を縦に使う者と横に使う者とが役割分担をして、1枚の紙の糊塗りの作業を行った。一度糊を塗ったあと、その紙を天日で乾かすのだが、冬場だとどうしても乾きにくかった。美濃製糸場には繭の乾燥場があったのでそこで乾かした。本郷町の校舎から美濃製糸場に移動してきた理由のひとつは、おそらく乾燥させる場を求めてのことであったと思う（注3）。

糊が乾くとさらに糊を塗り、その上に紙を重ねていった。紙が「生乾き」でも塗った記憶がある。何枚紙を重ねたか、何回糊を塗ったかははっきりと覚えていない。何回も何回も繰り返し糊を重ねて塗った記憶はある。紙と紙との間に空気が入ってはいけないのだが、空気が入っているかどうかは乾いてみないとわからなかった。空気が入ってしまった部分をごまかすために、誰かが針で刺して空気を抜いたが、これが見つかってひどく叱られたことがある。穴をあけたらガスが抜けてしまうので気球紙にならないからだ。

気球紙生産はほぼ1日仕事であったが、作業自体も監督もそれほど厳しくなかった。携わった期間もはっきりと覚えていないが、短かったと思う。そののちに動員された造兵廠の仕事がつかったので、気球紙生産は比較的楽だったように思えるのだろう。他の地域の女学生の話によれば、紙を押して広げる作業が重労働で、「手指がこすれて痛い」「指紋が消えるほどだった」というのだが、これは裁断した気球紙を気球型に仕上げる作業にまつわる話である。武儀高女や美濃製糸の作業場では気球紙を作るだけであったから、手指を痛めるような作業工程はなかった。

（注1） 最初に塗る糊は、紙に含浸させるために粘度を弱くしてあった。2度目以降塗る糊は気密性を高めるために粘度が高くしてあった。

（注2） 空色の染料を混ぜたのは、気球紙を空色に染めて敵機に発見されにくくするための工作。

（注3） 美濃製紙株式会社は地方資本の製紙会社で、1919（大正8）年に発足した。太平洋戦争により最大の輸出先米国市場を失った結果、経営縮小を余儀なくされ、1943（昭和18）年には日本蚕糸製造株式会社に工場が接収された。女学生を動員しての気球紙生産は翌年に開始される。

4 その他の記憶

気球紙生産と直接関係はしないが、聞き取りの際、他の貴重な話も聞けたので併せて以下に記録しておく。

自分たちは、物心ついた頃から戦時体制で、それが当たり前だったが、いよいよ米英と戦うと決まった時は何かしら寒気がした。中国（当時の呼び方は支那）相手とはちがうと子どもながらに感じたのだろう。とても不安な気持ちに襲われたことを記憶している。

美濃製紙場での気球紙生産は途中で終わった。次は関の造兵廠（旧中濃病院のあった場所）で日本刀の生産に携わった（注1）。仕事の内容は、刀の鞘のハンダをヤスリで削ったり、プレス機械で刀の鏝の型抜きをしたりする作業であった。

関は刃物の町だから、戦時中には軍刀生産が盛んだった。だからこのような工場があったのだと思う。工場は陸軍直轄で、配属軍人が厳しく監督していたのでとても恐ろしかった。遅刻や脇見はもってのほか、もちろん厳禁で、作業に遅刻した年配の人がきつく叱られていたことを記憶している。若い男性は戦地に動員されているので、内地の工場に動員されたのは年配の男性や女学生であった。監督の軍人は相手が年配でも容赦なく叱った。

ある日、ひとりの年配の男性が遅刻してくると、監督の軍人（牛田軍曹といった）がそ

の男性にバケツを持たせ、頭上に持ち上げさせた。男性が疲れて倒れると殴打し、また同じ姿勢でバケツを持たせた。それがいくたびか繰り返された。自分たち女学生がその姿を見て怖くなり泣き出すと、「非国民に同情する奴もまた非国民だ」と怒鳴られた。その時のことははっきりと記憶している。今でも忘れられない光景である。終戦の翌日、皆が牛田軍曹を探したが、すでに姿は見あたらなかった。報復を恐れて逃げたのかも知れない。

造兵廠に米軍の艦載機が来襲したことがあった。工場から北の方角（下有知の山王山方面）に向かって逃げる自分たちに機銃掃射を浴びせかけてきたので、走りながら田んぼのあぜみちのわきに逃げ込んだ。幸い犠牲者はひとりもいなかった。

このように、自分たちも危険な目に遭ったが、それでも田舎だからのんびりしていたのだと思う。戦地の兵隊さんたちはもちろんだが、名古屋や岐阜で空襲を経験した人たちも大変だったと聞いている。岐阜空襲の時には関からも空が真っ赤に染まって見えたことを記憶している。

米英との戦いは不安だったが、日本軍の「連戦連勝」をいつも聞かされたので、「日本軍は強い」「必ず勝てる」と思っていた。アッツ島に始まる玉砕にはショックを受けたが、いずれ日本は反撃して勝てると教えられていたし、実際そうなると思っていた。蒙古襲来の時のように神風は吹くと信じていた。今から思うと信じられない話だろうが、当時はそういう時代であった。

不安はあったが何とかなると思っていた。滅私奉公が当然、英語は敵性語だから使用禁止、竹槍どころか拾ってきた木の棒きれで本土決戦に備えた訓練を行う時代だった。訓練を指導する学校の先生も厳しかった。今と違って学校の先生の教えは絶対で、逆らうことなど考えられなかった。

厳しく苦しい時代だったが、あの時代に「耐える力」が身に付いたと思う。二度と自由が弾圧されるようなことはあってはならないが、今の日本は豊かで自由な反面、やみくもな自己主張がまかりとおっているような気がする。最近、若い親たちによる野放図な子育てが目立つ。子どもの教育には、ある程度の制約を教えることも必要なので、その点では今の子どもは気の毒のようにも思う。

今でも、戦地で死んでいった人のことを思うと悲しくなる。「お国のために働くのは名誉」といわれた時代だから、若い人の中には実際それを信じて戦地に行った人もいたし、周囲の人々も表向きは出征を「おめでとう」とお祝いしていた。でもそれが本音だったかどうかはわからない。少なくとも母親の中に、自分の息子の出征を喜ぶ人はいなかったと思う。しかし昔の女性は気丈だったので、人前で弱音を吐くようなことはなかった。息子さんが3人とも戦死した母親を知っているが、人前では決して泣いていなかった。今思い出しても気の毒な話である。

終戦の日は休日だった。とても暑い日だったと記憶している。家のラジオで聞いた玉音放送は雑音ばかりで聞こえなかったが、戦争が終わったと聞いて、正直ほっとした。泣いている大人もいたが、負けたことの悔しさや悲しさよりも、ある種の解放感・脱力感があったように記憶している。そのように感じるほど戦時中の生活は苦しくつらかった。

（注1） 太平洋戦争直前、対日経済包囲網が形成される中、関の刃物産業は存続の危機を迎えた。しかし本土決戦が叫ばれるようになると、「大和魂の象徴」「敵陣に切り込む霊器」として再評価されるようになった。

おわりに 聞き取りを終えての感想

聞き取りの最中、第24期生の皆さんの記憶力の良さに驚いた。「何十年ものあいだ、風船爆弾のことを話題にすることなどほとんどなく、記憶もあやふやだ」とおっしゃいながらも、当時の話が次々とおぼれるようになってくる。上官の名前まで出てくるのだから、当時の印象がよほど強かったのであろう。

皆さんが一様におっしゃるには、「何のためか」「どこに飛ばすのか」「どの程度の効果があるのか」、何ら詳しい説明を聞かされることなく、ただ黙々と作業に従っていただけということであった。しかしそのようなつらい日々の中に、「楽しい思い出」もあるという。当時の同級生との友情、つらくとも仲間がいることで励まされたというエピソードには心打たれた。つらいときであるからこそ、人と人との触れあいがありがたく思えるのであろうか。そんな皆さんのお話を聞きつつ、平和で豊かではあるが、時に寒々とした事件が起きる今日の日本社会についても考えさせられた。

今回の取材を通じ、参加者全員が感じたことは、やはり平和の尊さである。聞き取りに協力してくださった方々も、幾度となくそれを強調されていた。次第に熱を帯びる口調からは、若い世代に戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えたいという心情が感じられた。

戦争の記憶が薄れ、風船爆弾のことも忘れ去られようとしている中、幸いなことに、当時女学生として動員された方々が在住されていて、我々はその方々のご協力により聞き取り調査を行う機会に恵まれた。15年もの間、発表を怠っていたことをお詫びしつつ、あらためてここに謝意を表したい。

【引用・参考文献】

- ・ 美濃市『美濃市史』1980
- ・ 五十川才吉ほか『図説 関・美濃の歴史』郷土出版社 1987
- ・ 吉野興一『風船爆弾・純国産兵器「ふ」号の記録』朝日新聞社 2000
- ・ 竹内孝夫『こんにゃくの中の日本史』講談社現代新書 2006

後 記

『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第6号』は、「戦争の記憶と郷土史」の特集号である。

終戦から76年の歳月が過ぎた今日、日常の会話からかつての戦争の話聞く機会がめっきりと少なくなった。終戦時に成人であった方々はすでに90代半ばを、幼少期の記憶を語れる方々も80代を過ぎている。今回は、子どもの頃に戦争を体験した方々からの聞き書きを2編掲載した。ともに貴重な記録である。

太平洋戦争中、この地域には陸軍の飛行場や兵器工場があった。本校の前身、武儀高等女学校の女学生も、風船爆弾や飛行機の製造工場に動員された。飛行機部品や燃料、弾薬は、本土決戦に備えて、滑走路近くの寺社や学校、地下壕に秘匿された。

後記を執筆するにあたり、「薄れゆく戦争の記憶」と一旦は書いたのであるが、ロシアのウクライナ侵攻に関する報道に接し、原稿の一文を書き改めることにした。

戦争は決して過去の出来事ではなく、今なお世界各地で進行しているし、心身に傷を負わされた人は大勢いる。戦争の記憶は決して薄れさせるべきではない。

(1) 「関飛行場及びその関連施設の調査 陸軍秘匿飛行場の作戦構想とその実態」

コロナ禍のため、様々な制約を受けつつも、地域の方々の協力を得て、比較的短期間のうちに調査を進めることができた(2021年2~8月)。

本研究は、令和3年度全校高等学校総合文化祭岐阜県大会(岐阜県高文連主催)で最優秀賞を受賞した。次年度、全国高等学校郷土研究発表大会(全国高文連後援)に岐阜県代表として参加予定である。さらに令和3年度全国高校生歴史文化フォーラム(徳島県立鳥居龍蔵記念博物館主催)では最優秀賞を受賞した。

(2) 「聞き書き・風船爆弾 戦時下の武儀高等女学校第24期生」

15年前に、武儀高等女学校卒業生の方々から聞き書きした記録である。未発表のまま、今日を迎えたが、本校創立100周年にあたる今年度、ようやく発表する運びとなった。

右の写真は、本校同窓会館(彩雲館)ロビーに掲示されたパネルを撮影したものである。詳しい出典は不明だが、戦時中の新聞記事からの転載したもので、武儀高等女学校の女学生が、航空機製造に従事している姿を撮影したものと考えられる。『創立五十周年記念誌』には、当時の女学生が、風船爆弾や飛行機製造のため、各地に動員されたと記されている。写真の出典に関しては現在調査中である。



岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第 6 号

発行：令和 4 年 3 月 15 日

発行所：岐阜県立関高等学校

岐阜県関市桜ヶ丘 2-1-1

電話 0575-22-5688

FAX 0575-23-7089

岐阜県立関高等学校地域研究部